

ピボット若林は 1991 (H3) 年、若林つどいの家として開所し、2002 (H14) 年、地域生活サポートセンターピボット若林に改称し現在に至ります。遠見塚地区の皆様を支えられ 30 年となりました。現在は相談支援事業「くれよん」、日中一時支援事業/短期入所「すきっぷ」、ホームヘルプサービス事業(グループホームにおける居宅介護)「ぴぼっと」を実施し、グループホーム 5 箇所「ひこうき雲」の管理センターを併設しています。日中一時支援事業/短期入所は、昨年 10 月に障害者家族支援等推進事業(レスパイト)の廃止に伴い日中一時支援、短期入所へ移行し、主な実施場所の変更がありましたので常時の受け入れは行っており、緊急対応等での受け入れとなっています。昨年度「地域住民の方々と交流ができるような取り組み(講座、サロン等)」を実施したいと考えていましたが、コロナ禍のため取り組みはできませんでした。今年度は新型コロナウイルスの状況を見ながら感染症対策を講じたうえでどのようなことができるのかを考えていきたいと思えます。

最近の利用者の方の出来事(エピソード)を紹介させていただきます。エピソード 1. A さんから「引越したい」「ひとり暮らししたい」という言葉が多く聞かれるようになりました。これまでもひとり暮らしの話は聞かれていましたが、その場だけでいつの間にか話題が無くなるが多かったのですが今回は様々な人に想いを伝える様子が見られ、わたしたちスタッフも A さんの本気さを感じました。現在ひとりで暮らすことをイメージした宿泊体験に取り組んでいます。A さんのチャレンジは始まったばかりですが、そのチャレンジをわたしたちスタッフも応援していきたいと思えます。エピソード 2. B さんはご家族と暮らしていましたが、ご家族が高齢なため自宅での生活が困難となりました。B さんが暮らすことのできるグループホームを探しましたが、職員体制、他入居者との関係等々から入居できるグループホームはなかなか見つかりませんでした。障害のある方が暮らすグループホームの数は年々増えていますが、障害の重い方が入居できるグループホームは十分ではありません。B さんは現在市外のグループホームで暮らしています。その後数ヶ月が経ち、グループホームがホームグラウンドとなったのはよいのですが悪戯が過ぎるところもあります。相談員は B さんのもとへ時折訪問し、B さんの今後の暮らしについて話し合いを続けています。B さんのより良い暮らしの実現に向けた支援はまだ続きます。

新型コロナウイルスの影響により、これまで当たり前に行ってきたことができない不安を抱えながらの生活となっています。この状況がいつまで続くのか誰にも分かりません。外出する機会が減りストレスを感じている利用者の方も少なくありません。これまで以上に利用者の方の気持ちをしっかり受け止め、ひとりひとりに合わせた支援を行っていききたいと思えます。



(センター長 飯田克也)

